

果樹母樹検疫の対象樹種にナシを追加

植物防疫所が行っている果樹母樹検疫については本誌第13号及び第15号で紹介したが、新たにナシがウイルス病検査の対象樹種に加えられた。

ナシについては、従来からナシエそ斑点病対策として検査対象にするよう要望があつたが、対象ウイルスの特定及び検定方法が確立していなかったため、植物防疫所では数年前からHN-39、Nouveau Poiteau (N.P.)などの感受性ナシ品種を用いてナシエそ斑点病の検定技法について試験を行い、ナシを検査対象とすることについて技術的な検討を行ってきた。



Nouveau Poiteau

また、果樹試験場の最近の研究で、ナシエそ斑点病とPear vein yellowsの病原が同じグループに

属することが明らかになったことにより、ナシの検査対象ウイルスをPear vein yellows virusとすることとした。

本病の検定にはHN-39及びN.P.を用いるが、保毒樹を接木検定した場合HN-39では葉にえそ斑点を生じ、N.P.では葉脈透過、えそ斑点が現われる。

今回のナシの追加により果樹母樹検疫の対象樹種はカンキツ類、リンゴ、ブドウ、モモ、オウトウ、スモモと合わせて7種類となった。

海外のニュース

ブラムポックスウイルスの分布拡大

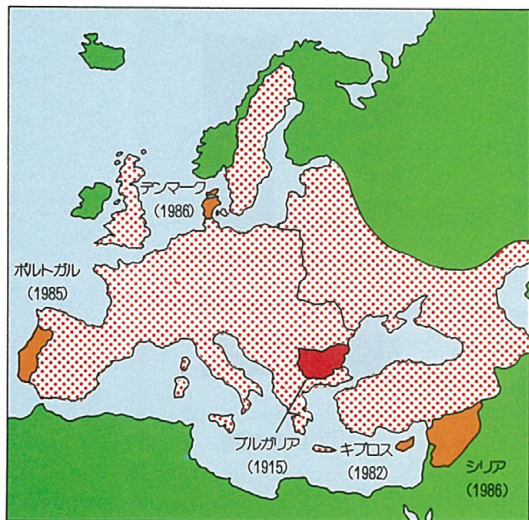
ブラムポックスウイルス (本誌No.16参照)は、1918年ごろブルガリアのスモモで初めて発見され、1932年ごろには同国のスモモ園で大きな被害が発生し、同時期にアンズでも発生が認められた。

本病は、ブルガリアでの初発生以来、約70年間にヨーロッパのほぼ全域と西アジアの一部にまで

分布を拡大した。最近では、1982年にキプロスでアンズから発見され、翌春にはモモ、アンズの母樹からも検出された。1985年にはポルトガルでスペインから輸入されたと推定されるアンズから発見され、1986年にはデンマークでも実験果樹園に植えられていた4年生スモモ8品種で感染が認められた。さらに、同年シリアでも発生が認められた。

ヨーロッパ・地中海地域植物防疫機関は本病を最も重要なウイルス病の一つであるという認識のもとに“Sharka International Working Group”を組織して、本病の防除に関する研究の推進とともに発生拡大の防止に努め、傘下の国々に対して厳重な植物検疫の実施を促している。

(FAO Pl.Prot.BullおよびRev.of Pl.Path.)



発行所 横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通6-64 ☎(045)211-2299
発行人 松本安生
編集責任者 鈺持秀禧
印刷所 内村印刷株式会社